

日中語の品詞のズレ ―二字漢語の動詞性をめぐって―

五味政信 今村和宏 石黒圭

要旨

中国語を母語とする日本語学習者は、漢語を容易に習得できる反面、母語の干渉による誤用が出やすい面がある。とくに、日中語の品詞のズレによって生じる誤用が目立つ。そこで本稿では、二字漢語を対象に、漢語の動詞性の有無によって生じる誤用を、500本を超える中国語母語話者の作文コーパスから帰納し、分析をおこなった。その結果、日本語では「低下する」のようにサ変動詞として使われるものが、「低下になる」のようにナ形容詞または名詞として使われる誤用が多く、こうした誤用は「変化」にかかわる語彙を中心に見られることが明らかになった。また、その理由として、語構成的な面では、日本語の「変化」にかかわる語彙では後項が重視されるために動詞的な側面が強くなること、意味の面では、他動性が薄いものに「する」を選択することへの心理的な抵抗があることのほか、日本語の感覚では「推移」「変動」を含むと見られる語が中国語の感覚では動詞性を有するものとして認識されにくいことなどがわかった。

キーワード：日中同形語 中国語母語話者 誤用分析 二字漢語 サ変動詞

1 研究の背景

学術的な専門日本語、とくに社会科学系の文章においては、分野を問わず二字漢語が多く用いられる傾向がある。そのため、二字漢語の語彙一般にかかわる問題点を整理しておくことが、専門日本語の教育をおこなう際に大切なことである。

一般に漢語は、中国語を母語とする日本語学習者にとって習得しやすい対象と考えられている。たしかに漢字というものを背景に持っている中国語母語話者が漢語学習に有利であることはいうまでもないが、漢語を日本語としてではなく中国語として理解し使用することによる誤用が目立つこともまた事実である。したがって、中国語を母語とする日本語学習者が陥りやすい誤用に配慮した独自の漢語教育の方法を考えることも、非漢字圏の学習者にたいする漢語教育と同じくらい重要であると思われる。

そこで、筆者らは、日本語学習者のなかで相対的多数を占める中国語母語話者を対象に、教材開発を目的としたプロジェクトを進めてきた。同時に、そのための基礎的研究として、一橋大学国際共同研究センター第4プロジェクト編（2004）、石黒（2004）、今村（2004）などを発表してきた。本稿もそうした研究プロジェクトの一部を構成する研究である。本稿では、日中両言語における同形語の品詞のズレ、とくに二字漢語の動詞性をめぐる差異に焦点を当てて議論していくことにしたい。

2 問題の所在

中国語を母語とする学習者が日本語の文章のなかで漢語を使用する際に悩む問題の一つが「動名詞」「漢語サ変動詞」などと呼ばれる「二字漢語＋する」である。そこには、

①ある二字漢語が動詞性を備えているかどうかの判断が、日本語と中国語とではズレがあるという問題。例「出生率が低下になる」「研究に夢中する」

②自動詞・他動詞の区分が明確でない中国語を母語とする学習者にとって、日本語の自動詞と他動詞の使い分けが困難であるという問題。例「経済を発展する」「資源が開発する」

という二つの問題が含まれるが、本稿では①のみを対象とする。②は多くの研究者が取り組んでおり、また現象そのものが複雑でもあるので、本稿では、考察の対象とすることはしない¹。

3 分析の方法と資料

本稿で分析に使う資料は、一橋大学でおこなわれた1993年～2002年の上級学習者対象の授業時に書かれた作文436本、および2000年以降に中国吉林省にある東北師範大学の上級レベルの日本語専攻の学生によって書かれた作文128本である。この中国語母語話者作文コーパスから、「になる」「する」にかんする誤用を抽出し、それを日本語、中国語双方のわから検討した。

コーパスは、統計的な検証が可能なだけの分量は備えていないので、定量的な分析をすることはせず、誤用例を抜きだして個別に検討するという定質的な分析にとどめる。定量的な分析については他日を期すこととしたい。

4 抽出された誤用例

中国語母語話者作文コーパスに見られた二字漢語の動詞性にかんする誤用は以下のとおりである。二字漢語の動詞性が問題になるのは、当該の語が述語として使われた場合であるが、「低下だ／である」のように「だ／である」として使われた場合は、動詞性の有無が判別しにくい場合が多い²ので、「低下になる」と「低下する」、「夢中になる」と「夢中する」のような「になる」と「する」の交替を問題にした³。

¹ ここではもちろん、二字漢語の動詞性の研究が皆無であったり、現象そのものが単純であるということを積極的に主張しているわけではない。漢語の動詞性の研究だけでも、日本語そのものの研究としては北條（1973）、石井（1987）、荻野（1996）、野村（1999）、小林（2004）などが、中国語との対照研究としては石・王（1983）、中川（2002）、中川（2005）などの代表的な研究があり、それらの先行研究を見ても、漢語の動詞性の判断が単純でないことがわかる。

² もちろん、「現代では、大学教授の社会的地位が低下だ」という文を見れば、「低下している」の誤用だとすぐにわかるのであるが、実際の作文の例を見ていくと、判断に迷うものも多い。そのため、本稿では考察の対象から除いた。

³ なお、「低下になる」を問題にする以外に、「低下な能力」といったナ形容詞の形を問題にすることもできる（名詞の形を問題にする場合は「成功の経済改革」のようになる）。ただ、この方法も、注2と同様、文法性判断に迷うものが多く、本稿の考察では「～になる」のみに絞ることにした。

また、動名詞を非動詞性の語としてとらえる「低下になる」のような誤用のほうが、非動詞性の語を動名詞ととらえる「夢中する」のような誤用よりもはるかに多かったため、本稿では前者を分析の対象とした。以下の用例は、紙幅の都合上、学生の作文から抽出された誤用例を簡略化したもので、典型的なものを選んで載せた⁴。

動名詞を非動詞性の語としてとらえる誤用は、当該の二字漢語が「変化」の意味を持つ場合が多い。それを以下では「プラスの変化」「マイナスの変化」「化」による変化「内面の変化」の四つに分けて整理、記述した⁵。

4.1 プラスの変化

最初に見るのは、「隆盛」や「上昇」、「改善」や「達成」など、状況が好ましい方向へと向かう変化を表すものである。実際の用例としては、「回復になる」「成熟になる」「復興になる」「成功になる」「改善になる」「解決になる」が見られた。いずれも、本来は「回復する」「成熟する」「復興する」「成功する」「改善する」「解決する」とすべきところである。

- (1) * 景気が回復になる。
- (2) * 内面が成熟になる。
- (3) * カラオケが流行になる。
- (4) * 娯楽産業がだんだん復興になる。
- (5) * 最後に成功になる。
- (6) * 治安が改善になる。
- (7) * 労働力不足の問題が解決になる。

4.2 マイナスの変化

次に見るのは、減少や消滅、崩壊や失敗など、状況が悪い方向へと向かう変化を表すものである。4.1「プラスの変化」と対になる変化である。実際の用例としては、「低下になる」「滅亡になる」「不足になる」「消失になる」「墮落になる」「失敗になる」が見られた。これ

⁴ 本稿で扱う誤用については、資料のなかから該当するものを一通り抜きだし、以降に例文の形で記載したが、誤用であるということが明確に判断できなかったものは載せなかった。また、同じ語で複数の書き手が間違えたものは代表的な1例のみを選んで載せた。

なお、石・王(1983)では、こうした誤用を生み出す可能性のあるものとして、「腐敗」「安定」「緊迫」「緊張」「興奮」「混乱」「混雑」「孤立」「充実」「熟練」「憔悴」「衰弱」「独立」「反映」「密集」「老成」「矛盾」「発達」「狼狽」(以上、中国語では形容詞的なもの)、「輕蔑」「一貫」「一致」「謙遜」「徹底」「昂揚」「激昂」「安心」「憤慨」「感激」「努力」「驚喜」「徹夜」(以上、中国語では副詞的なもの)といった二字漢語が挙げられている。

⁵ 中川(2002)では、(A)常態からの一時的逸脱(緊迫、緊張、憤慨、憤激、衰弱、腐敗、混雑、混濁、混乱、矛盾、憔悴、欠乏、貧乏、低迷、困惑)、(B)変化・進歩(発達、安定、充実、固定、肥大、成熟、老齡、熟練、反映、繁盛、繁茂、隆盛)、(C)心内操作としての比較(孤立、一致、対立、独立、適合)、(D)動作性の読み込み(放蕩、謙遜、活動、活躍、固執、徹底、卑下、了解、肯定、否定、努力、悲観、樂觀、達観)の4つに分けて分類が施されている。また、それとは別に「方向を表す形態素を含むもの」として「低落」「低下」「隆起」が挙げられている。

らも、本来は「低下する」「滅亡する」「不足する」「消失する」「墮落する」「失敗する」となるべきものである。

- (8) * 数学的能力が低下になる。
- (9) * 人類が滅亡になる。
- (10) * 食料が不足になる。
- (11) * 娯楽産業がだんだん消失になる。
- (12) * 自分が墮落になる。
- (13) * 達雄が事業に失敗になる。

4.3 「化」による変化

動名詞を非動詞性の語と考えた誤用で「プラスの変化」「マイナスの変化」と並んで多かったのが、この「化」による変化である。

「悪化になる」「鈍化になる」などの二字漢語の用例があればよかったのだが、そうした二字漢語の用例は見あたらなかった。そこで、「化」が接辞であることに鑑み、以下では、三字漢語の「複雑化になる」「多様化になる」「人格化になる」「近代化になる」「規範化になる」「形式化になる」を取りあげた。これらは、「複雑化する（される）」「多様化する（される）」「近代化する（される）」「人格化する（される）」「規範化する（される）」「形式化する（される）」⁶となるべきものである。

- (14) * 銀行の業務が複雑化になる／多様化になる。
- (15) * 中国が近代化になる。
- (16) * 自然が人格化になる。
- (17) * 駅の管理が規範化になる。
- (18) * 学生達の考え方が形式化になる。

4.4 心理面の変化

4.1～4.3の3つの「変化」のなかに収まらないものに「心理面の変化」がある。用例数も少なく、専門日本語とも関係が薄いものと考えられ、上記の3つの「変化」に準じて考えてよいだろう。「混沌になる」「安心になる」が見られた。

- (19) * 頭が混沌になる⁷。
- (20) * 気持ちが安心になる。

⁶ (17)(18)の例文では、「規範化される」「形式化される」と置き換えると厳密にはおかしい。前者は「マニュアル化される」ことを、後者は「表面的になる」ことを示しているものと思われる。ここには、日中漢語語彙の微妙な意味のズレが観察される。

⁷ ここでの「混沌」は「複雑なことを考えて混乱する」の意味で使われている。「混沌する」は「混沌とする」として使われるのが普通で、「混乱する」にくらべて動詞として使われることはまれではあるが、実際の文章を見ていくと「混沌する時代」「混沌する世界」「混沌する国際情勢」などといった例にしばしばぶつかることがある。

4.5 関係の構成

「変化」の枠組みではとらえられないものに「関係」の構成を表すものがある。主として対立関係を表すものであり⁸、「対立になる」「矛盾になる」が見られた。

「関係」の構成を表すものはたしかに動詞性が薄く感じられ、用例数が多ければ、サ変動詞に動詞性を見いだせないカテゴリとして論じる価値がありそうであるが、実際の用例数が少なかったので、ここでは詳しく述べることは避ける。

(21) *徳川家康が豊臣秀吉と対立になる。

(22) *自分の考えが矛盾になる。

4.6 語彙的な誤用

「変化」「関係」いずれの枠組みでもとらえられず、単なる語彙的な誤用と考えられるものも若干存在した。以下の(23)「夢が行動になる」は「夢の実現にむけて行動する」の意味であろうし、(24)「消費者の愛用になる」は「消費者が愛用する」の意味であろう。

(23) *私の夢が行動になる。

(24) *商品を消費者の愛用になる。

4.7 非動詞性の語を動名詞としてとらえる誤用

4.1～4.6で「動名詞を非動詞性の語としてとらえる誤用」を一通り見たので、ここでは「非動詞性の語を動名詞としてとらえる誤用」についても参考までに見ておこう。

(25) *蜂の死に感傷する。

(26) *私が恋愛に夢中する。

(27) *色は元気なピンクやイエローが中心して、ミニスカートとびったり合う。

(28) *喫煙が体に有害する。

(25)「感傷する」は「感傷的になる」、(26)の「夢中する」は「夢中になる」、(27)の「中心して」は「中心になって」、(28)の「有害する」は「有害になる」であろう。用例数が少なく、また類型化できそうにないので、ここでは事実の指摘に留める。

5 誤用の原因

前章において、「変化」を表す二字漢語を述語として表現する際に、日本語では「低下する」のようにサ変動詞化しなければいけないところを、中国語を母語とする学習者は、「低下」を名詞またはナ形容詞としてとらえ、「低下になる」の形にしやすいことを見た。

その原因を中国語のがわから探ってみるために、中国語を母語とし、日本語の研究・教育

⁸ 対立関係だけでなく一致関係もこうした傾向がある。「～になる」ではなく「～である」であるが、今回の作文コーパスのなかで次の例が見られた。「砂漠とモンスーンでは風土がいくら違うといっても、本質的には一致である。」

に従事している5名にこの誤用の原因を尋ねてみた。その結果、興味深いコメントが得られた。その要点は以下の3点にまとめられる。

1点目は、日本語の二字漢語動名詞を「変化」の枠組みでとらえるとき、その背後には「變得」「成為」などの中国語が思いうかぶということである。「變得」は程度の変化や部分的な変化を表すもので、主として形容詞の変化に使われるものであり、「成為」はステイタスの変化や全面的な変化を表すもので、主として名詞の変化に使われるものである。つまり、中国語母語話者は「変化」を表す二字漢語をサ変動詞としてではなく、形容詞または名詞としてとらえる傾向がある。このことは、「～になる」という形を選択したことを別の側面から裏づけるものである。

2点目は、「する」という動詞は他動性を表すものであり、自然に生起する事柄には使いにくいという心理が働くということである。日本語の発想では行為の結果を表すときに、「服を洗うときれいになる」という自発的なとらえ方が普通であるが、中国語の発想では「服を洗ってきれいにする」という行為を含んだ表現が好まれる。つまり、中国語の発想では、自然に生起する事柄と人為的な事柄を明確に分け、前者には「～になる」、後者には「～にする」を当てて考える傾向がある。そのため、自然に生起する事柄に「～する」を使うのは心理的に抵抗が強いということになる。

3点目は「～化」に関わることである。「学生達の考え方が形式化になる」を例にとると、「形式化」は中国語において以下のような意味と機能を持つ。

①中国語の「形式化」は日本語の「形式化」「形骸化」「マンネリ化」「形式的」「儀式的」といった意味を広くカバーしている。

②中国語の「形式化」は動詞（おもに自動詞）、動作性を持つ名詞のほか、形容詞としても使うことができ、それが「変化」の用法と重なった可能性がある。

つまり、「～化」は中国語では日本語よりもはるかに意味の幅が広く、日本語母語話者の感覚では、「～化」は動名詞、「一的」はナ形容詞と考えられているものが、「一的」が名詞の連体修飾を表す中国語の母語話者の感覚では、「～化」は形容詞の意味までを覆う可能性があるということである。この点は、日本語を母語とし、中国語がわからない日本語教師が押さええておかなければならない「勘どころ」（黄・井上 2005）の一つであると思われる。

6 動名詞と非動詞性の語の境界線

6.1 境界線の基準を示す必要性

4章の調査結果を単純に考えると、中国語を母語とする日本語学習者は、「変化」を表す二字漢語を述語として表現する際に、母語の干渉によって「低下になる」として名詞またはナ形容詞としてとらえがちなので、日本語では「低下する」のようにサ変動詞化しなさいと教えればよいということになる。

しかし、日本語でも「低下」は「業績が低下する」であつても、「低調」や「不振」は「業

績が低調になる」や「業績が不振になる」⁹でなくてはならない。つまり、日本語でも「低調」のようなナ形容詞や「不振」のようなサ変動詞化しない名詞では「低調する」「不振する」にならないのである。したがって、学習者にたいしては、どのような二字漢語が動名詞であって、どのような二字漢語がナ形容詞や非動詞性名詞かを判断する基準を示す必要がある。

6.2 語構成の観点から

まず、二字漢語の語構成、すなわち前項と後項の要素の性格とその結びつきという観点から動名詞と非動詞性の語の境界線が明確にできるかどうか考えてみたい。語構成の観点から動名詞か非動詞性の語かを見分けられる基準があれば、当該の語の意味に立ち入ることなく説明がつくので都合がよい。しかし、そうした明快な基準を見いだすのは難しい。

今回取りあげた誤用例は、「回復」「成熟」「流行」「復興」「解決」「滅亡」「消失」「墮落」「失敗」「混沌」「対立」など、VVのパターンが多く見られる¹⁰。しかし、「成功」のようなVNのもの、「改善」のようなVAのもの、「低下」のようなAVのもの、「不足」のようなSVのもの、「安心」のようなANのもの、「矛盾」のようなこうした分析そのものが無意味なものなどがあり、はっきりとした傾向は見られない。

ただ、中川（2002）が指摘するように、日本語では、たとえば「低下」や「低落」が「低く下がる」や「低く落ちる」のように後項が主要部（Head）と解釈される結果、動詞的側面が活性化されやすいのに対し、中国語では前項と後項が対等に並ぶ並列構造であるため、比況性を帯びて形容詞的に解釈されやすいということは、学習者に伝える価値のある情報であろう¹¹。

その意味で、後項が動詞的要素ではなく名詞的要素の場合、動詞として機能しにくいことになる。たとえば、「増える」意を表す二字漢語のうち、「倍增」「漸増」「微増」「急増」「激増」のように後項に動詞的要素「増」がくるものであれば軒並み「する」がつくが、「増額」「増量」「増税」「増収」「増員」のように後項に名詞的要素がくると、「給与が増額になる」「（ラーメンの）具が増量になる」「消費税が増税になる」「酒税が増収になる」「事務職員が増員になる」のように、変化の対象が主語にきたときには「する」がつけにくい¹²。一方、前項に「増」がくる場合であっても、後項に動詞的要素がくる「増加」や形容詞的要素がくる「増大」は「する」をつけることが可能である。

⁹ 実際には「業績不振になる」という形で使われることが多い。

¹⁰ 以下、Vは動詞的構成要素、Nは名詞的構成要素、Aは形容詞的構成要素、Sは接辞を表す。

¹¹ 中川（2002）の17-18頁を参照。

¹² もちろん、これらは自動詞の場合であり、他動詞にすれば「給与を増額する」「具を増量する」「消費税を増税する」「事務職員を増員する」のように「する」をつけることができる（ただし、「酒税を増収する」は不自然）。「増額」「増量」「増税」「増収」「増員」という語がまさに「動詞＋目的語」という他動詞的な語構成をなしているからである。なお、自然現象「増水」は、「河川が増水する」のように例外的に「する」をつけることが可能である。その意味で、ここでの指摘はすべての二字漢語において当てはまるわけではなく、あくまで傾向の問題に留まる。

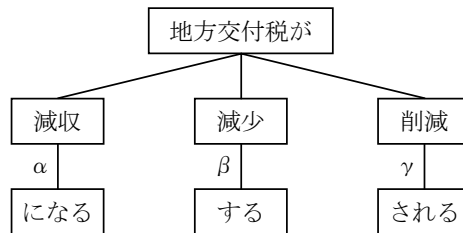
以上のように、日本語の「変化」を表す二字漢語では、後項が変化の到達点を表すことが多い。そのため、後項に動詞的要素がくるか、前項に動詞的要素がきて後項に変化の結果となる形容詞的要素がくる場合に動詞性を帯びやすくなり、「する」がつく可能性が高まる。したがって、その点に注意するように、中国語を母語とする学習者に伝える必要があるということである。

なお、ここで「～化」についても若干説明しておきたい。「～化」に限っていえば、一律に「～化する」になると教えてほとんど問題はない。「～になる」と「～化する」には明確な棲み分けがあるからである。

当該の二字漢語において、「化」のつかない形で変化の結果を問題にする場合、名詞的要素であれば「～的になる」（たとえば「近代的になる」）、形容詞的要素であれば「～になる」（たとえば「複雑になる」）のように「～になる」の形をとる。それにたいして、「化」のつく形で変化の結果に注目する場合は、「近代化する」「複雑化する」のように「～化する」という形をとる。「～化になる」という形はまったく使われないわけではないが、「～化になる」は「選挙の候補者を一般に公募することが党の近代化になる」のように「～化につながる」という意味でのみ使われる。また、こうした意味なら「選挙の候補者を一般に公募することで党は近代化する」と言いかえられるので、わざわざ「～化になる」を教える必要性は低いと思われる。

6.3 意味の観点から

6.2 で見たように、二字漢語の場合、語構成の観点だけでその品詞性を一律に判断するのは難しい。述語として用いる際に、当該の二字漢語に「になる」「する」「される」のうちどれがつくかによって、以下の三つのパターンのいずれかに当てはまり、その品詞性が明らかになるからである。



α 地方交付税が減収になる。

β 地方交付税が減少する。（自動詞）

γ 地方交付税が削減される。（受身＝自動詞）

本稿で問題にするのは α と β の差異である¹³。 α を見てもわかるように、日本語では「二字漢語+になる」も「二字漢語+する」と同様に「変化」を表す。したがって、その区別をどのように説明し、どのように学習者に伝えるかが問題になる。

すでに見たように、動詞性の有無の混同は、一般に、量の増減を表す二字漢語や「二字漢語+化」に多く見られる。こうした漢語では、中国語母語話者が「～になる」を選択し、日本語母語話者が「～する」を選択する傾向がある。

日本語母語話者が「～する」ではなく「～になる」を選択するのは、二字漢語の部分に事態の推移や変動を感じない場合である。たとえば、「低下」「低迷」は事態の推移や変動が感じられるので「低下する」「低迷する」となるが、「低調」「不振」はそうした推移や変動が感じられず、固定的なので「低調になる」「不振になる」¹⁴となる。つまり、日本語の「～になる」は、事態の推移や変動が感じられない語に「変化」を付与する文型であり、事態の推移や変動の意味をすでに有する語に「変化」を与える文型ではないのである。もともと「変化」の意味を備えている語に「～になる」をつけると、屋上屋を架すことになってしまう。もともと推移や変動の意味を持っている語を述語に据える場合は、「～する」をつけてその動詞性を引き出すだけでよい。

日本語でも、二字漢語の動詞性を薄め、固定的な局面としてのとらえ方を強めれば、二字漢語の部分の状態として認識され、「～する」を用いずに名詞として「変化」を表すことは可能である。たとえば、「減少になる」は言いにくくても「減少傾向になる」「減少状態になる」と言うことはできるし、「になる」のかわりに、変化を強く表す「に転じる」や「に移行する」を用いて「減少に転じる」「減少に移行する」と言うこともできる。

7 まとめと今後の課題

本稿では、動詞性を帯びた日本語の二字漢語について、中国語母語話者がその動詞性を認められずに「～になる」の文型で使ってしまう理由について考察した。日本語では、事態の推移や変動を表す二字漢語が「～になる」という変化の文型ではとらえられずに「～する」で表現されるのにはたいし、中国語母語話者は母語の干渉から、事態の推移や変動を表す二字漢語を「～になる」の文型でとらえがちであることを示した。

¹³ 4.3 で見たように、「～化」の場合、 α と γ の差異を問題にすることもありうる。

¹⁴ 「低調になる」「不振になる」がなぜ「低調する」「不振する」にならないか説明するのは難しい。「好調だった」ものが「変化」した結果、「低調になる」「不振になる」ように感じられるからである。反対に、「安定する」「一定する」のような変動が感じられないものに「する」がつくのも不思議な現象である。その理由は次のように考えられる。

「低調」「不振」はあくまでも目のまへの状態を固定的な局面としてとらえたものである。そのため、局面の移行を表すためには「～になる」をつける必要がある。それにたいし、「安定」「一定」は目のまへの状態だけでなく、「安定」「一定」するまへの不安定な状態、すなわち局面の推移のプロセスも含んでいる。そのため、「～する」をつければ動詞として機能しうる。中川（2002）で指摘されている「一点凝視」的などらえ方と「二点参照」的などらえ方の違いであると考えられることできそうである。

本稿で問題にした「変化」を表す二字漢語は、社会で起きる諸現象を正確に記述するのに欠くことのできない語彙である。社会科学系の専門分野を中心に頻用されるこうした二字漢語を正しく使えるようになることは、中国語母語話者に限らず、学術日本語を学ぶ学習者全般にとって重要なことであろう。

なお、すでに述べたように、本研究の課題としては言語コーパスを用いた研究ではあるものの、定量的な分析がなされていない点が挙げられる。しかし、学習者の母語を統一したうえで、定量的な分析に堪えうるだけの大規模なデータベースを作るのは、資料収集の観点から考えてきわめて難しい作業である。そのため、こうした現象が起きやすいと予想される語を集めて、中国語を母語とする日本語学習者を対象に大規模な実験をするほうが、より精度の高い研究ができると同時に、母語話者別の教材開発にもつながっていくと考えられる。こうした方法も今後検討していきたい。

付記

本研究は、平成 15～18 年度文部科学省科学研究費補助金（基盤研究(C)(2)）「中国語母語話者に対する社会科学系専門日本語教育のための教材開発」（研究課題番号 15520328、研究代表者：五味政信）の助成を受けておこなったものである。

参考文献

- 石井正彦（1987）「漢語サ変動詞と複合動詞」『日本語学』6・2
- 石黒圭（2004）「中国語母語話者の作文に見られる漢語副詞の使い方の特徴」『一橋大学留学生センター紀要』7
- 今村和宏（2004）「社会科学基礎文献におけるサ変名詞のふるまい—作文指導への指針と「専門用語化指数」の試案—」『専門日本語教育研究』6
- 荻野綱男（1996）「言語データとしての話者の内省・新聞 CD-ROM・国語辞典の性質—サ変動詞の認定をめぐる—」『計量国語学』20・6
- 黄麗華・井上優（2005）「対照研究と日本語教育」松岡弘・五味政信編著『開かれた日本語教育の扉』スリーエーネットワーク
- 小林英樹（2004）『現代日本語の漢語動名詞の研究』ひつじ書房
- 石堅・王建康（1983）「日中同形語における文法的ズレ」『「日本語と中国語の対照研究」別冊—中文日訳の諸問題』日中語対照研究会（大阪外国語大学）
- 中川正之（2002）「中国語の形容詞が日本語でサ変動詞になる要因」玉村文郎編『日本語学と言語学』明治書院
- 中川正之（2005）『漢語からみえる世界と世間』岩波書店
- 西谷まり（2004）「社会科学分野で使われる日中同形異義語」『一橋大学留学生センター紀要』7

野村雅昭（1999）「サ変動詞の構造」森田良行教授古稀記念論文集刊行編『日本語研究と日本語教育』明治書院

一橋大学国際共同研究センター第4プロジェクト編（2004）『日中両言語における重なりと異なり―日本語教育の現場から―』一橋大学国際共同研究センター

北條正子（1973）「サ変になり得る名詞（漢語）」鈴木一彦・林巨樹編『品詞別日本文法講座 10 品詞論の周辺』明治書院